

# 今年のバレンタインに かりんとうチョコランチはいかが？

2月14日のバレンタインデーにはチョコレート  
を贈る方が多いのではないのでしょうか？  
どんなチョコレートを贈ろうか迷ってしまう方  
も多いかと思いますが、今年は民衆交易のチョコ  
レートはどうですか？

市販のチョコレートではちょっと物足りない  
という方は、民衆交易の商品を使って作る【か  
りんとうチョコランチ】をおすすめします。



### 材料

- チョコラ デ パプア(オーレ  
でもビターでも): 2~3枚
- マスコパド糖かりんとう:  
40g(1袋の半分程度)
- パラゴンバナナ、カカオ  
ニブ、コーンフレークなど:  
お好みで

### 作り方

1. かりんとうをポリ袋等に入れ  
たたいて、細かくする。
2. チョコレートを細かく刻んで、湯せんして溶かす。
3. 2に1とカカオニブや細かくしたコーンフレーク、  
パラゴンバナナを入れる。
4. 一口サイズにしてお皿などにのせ、  
冷蔵庫で30分程度冷やす。

かりんとうだけだと固いので、コーンフレークなど入ると食べやすくなり  
ます。パラゴンバナナ(そのままでも干してドライバナナにしても)を入れ  
るのもおすすめです。簡単なので、ぜひ試してみてください。

福島智子(ふくしま・ともこ/APLA)



チョコラ デ パプアやカカオニブのご購入はこちら▶



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia)  
フィリピン・ネグロス島での30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のための  
ネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 [www.apla.jp](http://www.apla.jp)

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)

パラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔が見える関  
係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <https://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F  
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから

特定非営利活動法人APLA 🔍

# 人から人へ PtoP ピープル NEWS vol.54 2023.02

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集

## インドネシア・南スラウェシの エコシュリンプ生産者たちの挑戦



食品残渣や魚粉を活用して製造した餌でナマスを養殖

## パラゴンバナナの 熟度管理 この道具あり!

from フィリピン

### タグ

パラゴンバナナ  
の輸入が始まっ  
た当初からある課題、  
それはバナナの熟度  
管理でした。日本に届  
いた時には過熟で真っ  
黒、反対にバナナが細  
くて未熟だと追熟加工  
しても黄色くならない  
…。それを改善するた  
めに始まったのが「タ  
グ」付けです。輸出するバナナは約80%の熟度で収穫するのが目  
安になります。バナナの花芽が出揃い花蕾を切り落とす作業の時  
に、タグ(リボンの様なビニールテープ)をバナナに括り付け、8~  
12週間後に収穫するという目印にします。タグは週ごとに色分けさ  
れており、それに基づいて適切な収穫時期の目途をつけます。この  
タグ付けを導入したことで、2~3ヵ月後にどれくらいのパナナが収  
穫できるかという収量の予測にも役立てられるようになりました。  
とはいえ、標高や地形、気候などが異なる様々な地域で栽培され  
るパラゴンバナナ。熟度のばらつきは永遠のテーマではありますが、  
タグ付けの導入で熟度管理が大きく改善されたことには変わり  
ありません。



赤いリボンがタグ

収穫時期を  
タグの色で  
管理する

吉澤真満子(よしざわ・まみこ/ATJ)



産地の暮らしを垣間見る  
1枚の写真から

## にここ顔で行く先は？

from  
ラオス

**ラオス**  
ボラベン高原のコーヒー生産者たちは、10月半ばから約3カ月のコーヒー収穫期の間、毎日早朝に起きて、摘み取ったコーヒーチェリーを入れる籠やお弁当・水筒を、耕耘機に付けたトラクターに積み込み圃場に出かけます。学校がお休みの日は、子どもたちもお手伝いします。将来、コーヒー農家を継ぐことに備えた実習にもなっています。

生産者の親戚も季節労働として手伝いに来て、おしゃべりしながらチェリーを摘んだり、お昼休みにピクニックのようにみんなでお弁当を囲んだりする様子は、収穫期を迎えたこの地域でよく目にする光景です。

名和尚毅(なわ・なおき/産地担当)



特集



# インドネシア・南スラウェシのエコシュリンプ生産者たちの挑戦

from インドネシア・南スラウェシ



エコシュリンプの養殖池が広がる地域における河川環境の改善のために、KOIN\*は2015年から東ジャワ州シダルジョ県において住民主体の家庭ゴミの回収システムづくりに取り組んできました(詳細はPtoP NEWS vol.37をご覧ください)。これまでKOINが活動の立

ち上げを支援してきた県内5つの村では、それぞれ村の住民自治組織を中心に家庭ゴミ回収が継続され、現在に至っています。また、そうした目に見える成果が他地域の住民にも刺激を与え、新たな動きにつながってきています。\*エコシュリンプの製造・輸出を担うATINAのスタッフとエビ養殖農士の有志たちが立ち上げたNGO。

## コロナ禍で活動開始

新たに動き出したのは、オルター・トレード・インドネシア社(ATINA)が日本向けのエビを買付けているもう一つの地域、南スラウェシ州ピンラン県のエビ生産者たちです。彼/彼女たちが、KOINによるシダルジョの事例に刺激を受け、自分たちの地域が直面しているゴミ問題を同じように解決していきたい!という熱い思いを表明したのは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミック前のこと。その後、ATINAとKOINの協力を得て準備を進め、2020年9月にピンラン県のエビ生産者や地元出身の学生たちによって「KONTINU(インドネシア・ブラックタイガーに関心のある者たちのコミュニティ)」という

NGOが正式に立ち上がりました。

そして、エコシュリンプの養殖池が広がるランリサン村での活動を手探りでスタートさせます。コロナ禍で移動や社会活動に様々な制約があるなかでの挑戦です。具体的には、地域住民に対する説明会の開催と住民組織の形成、コンクリート製のゴミ箱の製作と村内への配置、三輪オートバイを改造したゴミ回収車の調達、村内で募集・面接をして採用した2人のゴミ回収人の研修……といった準備を経て、2021年6月から村での家庭ゴミの回収活動が動き出しました。

## ゴミを資源として活用

ランリサン村での活動が開始され1年強が経過した2022年8月、現地を訪問することができました。KONTINUのメンバーに村内を案内してもらい、まずは、村のゴミの選別場を見学しました。現在、村の住民組織と協力して、2人の回収スタッフが月・水・土の週3回、自動三輪車で村内の家庭ゴミを回収しています。見学した当日も、2人の女性がプラスチックゴミを手選別していました。選別したプラスチック、ビン、缶などは、県内の回収業者に販売しています。その売上は、KONTINUではなく、村の住民組織の収入となり、活動を継続する資金に充てているとのことでした。

さらに、回収した食品残渣を活用して蛆虫を育てている場所に向

かいました。事前に蛆虫と聞いて想像していたものとは少し違う見目でしたが、ネットで作った小屋の中でたくさんの幼虫が育っていました。話を聞くと、幼虫そのものではなく、脱皮した殻を粉碎して、エビの頭や魚粉などと混ぜて、ナマズやテラピアなどの淡水魚用の餌を製造・販売しているとのことでした。魚粉は、漁師さんたちが海で獲ったものの市場では値がつかない雑魚を乾燥させたものだそうです。有機ゴミや未利用資源がうまく地域の中で循環していることが素晴らしいですね。



ゴミ回収を担うムハンマド・ヌルさん

## 気候変動の影響も深刻化

2022年12月末、オーストラリア付近で発生した低気圧の影響を受け、スラウェシ島南部に大雨と強い風がもたらされ、ピンラン県各地で高潮による洪水被害が起きました。養殖池は、海に沿って広がっているため、大雨による水位の上昇と海からの大波によって、エビや魚の多くが流されてしまったようです。なお、この地域の多くの家屋は伝統的な高床式のため、住居には大きな被害は出ていないとのことですが、養殖池の土手の修繕には多大な労力がかかります。復興に向けた作業、そして動きはじめた地域のゴミ問題に対する行動に加えて、気候変動の影響に対する対策も切実な課題となっています。



プラスチックゴミの選別作業

野川未央(のがわ・みお/APLA)